

研究者

聞く

に

文学部 日本文学科
安西 晋二 准教授

昭和と令和をつなぐ文学の橋

安西晋二・文学部日本文学科准教授の専門は、澁澤龍彦。戦後日本を代表する人気作家であり、その作品を手にとった読者がまるで世界の深淵を覗き込むような、そんなダークな世界観で知られる。そこには、いったいどんな魅力が宿っているのだろうか？

地下通路が、無限ループの恐怖空間へと転じていく。令和5(2023)年にインディーゲームとして発売され一世を風靡し、7年8月に映画版が公開された『8番出口』のような作品は、ぞっとするものが日常の風景にそのままとけこんでいる感覚を、うまく表象しているのかもしれない。

そんな現代的な感覚と、澁澤龍彦が描いた世界の手触りが、不思議と重なり合うかもしれない——そんな予感に促されているのが、安西准教授だ。〈怪奇〉は時代を超えて、私たちの日々にとつと顔を出す。

4・5面に続く

みはるかすもの

「十年一昔」という言葉がある。世の移ろいの速さを語る常套句として、今も口に上る▼振り返れば、Windows 95の発売からおよそ三十年。インターネットの黎明から数えて、ホームページが姿を整え、ブログが咲き、SNSが日々の合間に溶け込み、いまや生成AIが文章も画像も夜更けを待たずに紡ぎ出す時代となった。三十年で「三昔」どころではない地殻変動が続く▼かつてイチロー氏(元プロ野球選手)は「小さなことを積み重ねることが、とんでもないところへ行くたひとつの道」と語った。しかしデジタルの世界では、一夜にしてとんでもないところへ運ばれ眩暈すら覚える。私たちはそ

の利便に酔いながら、置き去りにされる不安を抱く▼もっとも「よりはやく、より便利に」を求める情熱は今に始まったものではない。明治の文明開化しかり、平成のモバイル革命しかり。蒸気機関車が人々の足を速めた時も、携帯電話が掌の中で姿を変えた時も、慣れ親しんだ速さはいつしか「当たり前」の顔をして、新しい便利はやがて日常の肌になじんでしまう▼「十年一昔」の「昔」は、人によつて長さが違う。三歳児にとつての一年は人生の三分の一、還暦の身には六十分の一にすぎない。フランスの哲学者アンリ・ベルグソンが説いた「持続」も、時計の時間と心の時間は別物だと教える▼疾走する時代に、自分だけでなく他者の時間軸にも意識を馳せたい。あなたの隣のひとの「ひと昔」は、いつの面影だろうか。

全国各地で発生した大規模災害で被災された皆さまへ

令和8年熊本地震、8月、9月に発生した大雨をはじめとする自然災害により被災された皆さまに衷心よりお見舞い申し上げます。
被災された学生やそのご家族の皆さま

をはじめ、被災地の皆さまの生活が一日も早く平常に復するよう、心よりお祈り申し上げます。
令和8年9月20日 国学院大学

令和8年度オープンキャンパス

3日間で過去最多の2万3千人が来場



渋谷・たまプラーザ両キャンパスで8月1、2日と22日に「OPEN CAMPUS 2026」を開催した。今年度の総来場者数は過去最多を記録し、両キャンパス合わせて2万3000人を超える受験生やその保護者らが参加した。
それぞれのキャンパスには朝から大勢の来場者が訪れた。各学部学科の教員によるガイダンスや模擬授業に熱心に耳を傾けたほか、個別相談ブースでは、入学試験制度や入学後の学生生活について教職員へ質問する姿も見受けられた。
学生によるトークショーでは、国学院大学に進学した理由や、受験勉強のアドバイス、大学での学びなどについて参加した受験生の目線に合わせて紹介Ⅱ写真。3日間を通して教職員や学生が本学での学びや、学部魅力を伝えた。

公開古典講座『源氏物語』と『万葉集』を取り上げ開催



令和8年度公開古典講座が、7月25日から29日にかけて渋谷キャンパス常磐松ホールで行われた。この講座は昭和初期に開講した「萬葉講座」の流れを受け継いだ短期講座で、例年、「源氏物語」と「万葉集」を取り上げて実施している。今年度の「源氏物語」の講座は、「常木」巻(前半)を読む、「万葉集」の講座は、「巻十七」を読む」と題し、本学教員をはじめ、13人がそれぞれ講座を担当した。

7月27日に行われた「万葉集」の講座では、上野誠・文学部教授(特別専任)が「破いと宴と―家持と池主の漢詩を読む―」と「越中国司巡行の旅―風土へのまなざし―」の2講座を行ったII写真。上野教授は、当時の日記には文学的な側面に加えて、歌の題材やアイデア、行事についての記録などを書き留めていく実用的な側面もあったと説明し、その内容が歌の理解に有用であると述べた。同教授のユーモアあふれる講義に、会場は度々笑いに包まれた。

最終日となる7月29日に行われた「源氏物語」の講座では、竹内正彦・文学部教授が「常夏の女と蒜食いの女」と題して講義を行った。竹内教授は、頭中将が語る「常夏の女(夕顔)」のエピソードを取り上げ、語り出しにある「痴者(愚か者)」という言葉に注目。この言葉が「男(頭中将自身)」を指すのか、「女(夕顔)」を指すのかをめぐり、古くから研究者の間で議論が重ねられてきたことを紹介し、一語に複数の意味を響かせる表現の妙を読み説いた。

同講座は9月9日から11月30日の期間でオンデマンド配信が行われる(有料)。詳細は本学HPを参照。



植物を通じて「万葉集」に親しみ、「万葉集」を通して日本の自然や文化を理解することを目的に、年に1度実施している公開講座「萬葉の花の会」が9月9日、たまプラーザキャンパスで開催された。午前の部では二つの講演が行われた。まず、上野誠・文学部教授(特別専任)が「橘を讀める」と題し

第32回「萬葉の花の会」植物を通して『万葉集』に触れる

て、「万葉集」における橘の歌と大伴家持の評価や政治的背景について講演。続いて、大石泰夫・文学部教授が「萬葉のこころ―大伴皇女の悲しみ―」と題して、「万葉集」の歌や歌に付された注から読み解く歴史的背景と人々の思いについて解説した。

昼食時には、「万葉集」に登場する食材を使用した弁当を堪能したり、「万葉集」に詠まれた約150種の草花を植栽している「万葉の小径」を散策したりするなど、参加者の多くが「万葉集」の世界観を満喫した。

午後の部では、辰巳正明・同会長(名誉教授)と渡邊卓・研究開発推進機構准教授が「奈良とは何か―日本の基層文化を考える―」をテーマにそれぞれ講演した後、対談を行ったII写真。

閉会にあたり、佐柳正三理事長は、「万葉の小径」を教職員とともに手探りで作ってきたこれまでの歩みを紹介したほか、「AI時代だからこそ日本人の心を大切にしたい」とあいさつし、会を締めくくった。

故 岡野弘彦名誉教授をしのんで 記帳台設置

4月24日に逝去した国学院大学名誉教授の岡野弘彦氏の長年にわたる功績をたたえ、感謝の意を表して国学院大学博物館内に記帳台を設けた。また、同館では岡野氏の業績や出版物が、師の折口信夫と並んで展示されている。期間は11月29日(日)まで。

国学院大学博物館の開館スケジュールは右記二次元コードから。



令和8年度 供花神饌ワークショップを開催



本学学生を対象とした供花神饌ワークショップが8月5日に渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催され、約30人が参加した。

供花神饌は、神饌として奉納する古代染めの和紙で作られる造り花のこと。本学では奉納するお花を作る貴重な機会として同ワークショップを2年に1度開催している。

はじめに、針本正行学長が「初めてで難しいこともあると思うが、一つ一つの作業を行う中で平安時代から受け継がれている日本の伝統文化を実感してほしい」とあいさつ。その後、学生らはグループに分かれ自然素材で作られた和紙を用いて「椿」と「竹」を作った。

参加した学生は、「歴史あるお祭りの一端を担わせていただくことを誇りに思う」と語った。

今回作成した供花は石清水八幡宮(京都府八幡市)で行われる石清水祭に奉納される。

生きがい講座を開催



人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター主催の「生きがい講座『聞いて触って楽しむあそびの世界』」が8月29日にたまプラーザキャンパスで開催され、乳幼児を連れた近隣の家族や院友などが参加した。

参加した子どもたちは、学生らと一緒に体を使った遊びや簡単な工作に挑戦。手先を器用に使うおもちゃを作ったり、学生が作ったおもちゃの音を鳴らしたりと、思い思いに楽しんだ。塩谷香・名誉教授も加わって保護者同士の相談会も行われ、子どもたちに苦手な食材を口にしてもらう工夫やスマホとの付き合い方など、子育てについての悩みを語り合った。



人間開発学部教育実践総合センターが主催する第17回夏季教育講座「教育実践フォーラム」が7月25日、たまプラーザキャンパスで開催された。本講座は毎年夏に開催しており、

第17回教育実践フォーラムを開催

今年度は「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものにするために―『好き』を育み、『得意』を伸ばす―」をテーマに、現役学校教員・保育者による事例発表や、本学教員・学生を交えた討議、意見交換が行われ、約550人が参加した。

冒頭、開会のあいさつに立った太田直之・同学部長(教授)は「本講座は教育に関する研究を現場の教員らと共有し、現在の教育課題について考えることを目的として毎年実施してきた。この講座が参加者にとって『深い学び』となることを願っている」と述べた。

続いて、「多様性の包摂と深い学び―多様性が先か、深い学びが先かを考えてみる―」と題し、学校法人桐蔭学園理事長で桐蔭横浜大学教授の溝上慎一氏が基調講演を行ったII写真。同氏は、次期学習指導要領の大きな柱の一つとされている「深い学び」について、知

識や事象が丸暗記で頭に入っている「浅い学び」の状態から、これまで学んだ知識や経験・疑問をつなげて理解できるようになることが原点であり、子どもたちが自分で書く、話す、発表するなどの学習を積み重ねることが「深い学び」の土台になると説明した。

また、次期学習指導要領のもう一つの柱である「多様性」については障害の有無や国籍、家庭の経済状況など多様な背景を持つ子どもたちを考慮した学校づくりが求められるとし、そのためには学校として教育課程全体の柔軟な編成が重要になると指摘した。

促進の具体的なイメージとして文部科学省が示す「2階建て」の考え方について、すべての学校が学習指導要領に基づいて取り組む基礎の1階部分と、各学校が独自のアプローチを行う2階部分に見立てて捉えることで、今後は柔軟なカリキュラム編成が可能となると述べた。

基調講演の後には、「保育・幼児教育」「国語」「理科」「音楽」「体育・保健体育」「特別の教科 道徳」「特別活動」「特別支援」の8つのテーマで分科会が開かれ、同学部の院友(本学卒業生)を含む現任教員や本学学生が多数参加。事例発表、討議、意見交換などが行われた。

海外での説明会・相談会を実施

海外から本学への進学を希望する受験生を対象とした進学相談会が台湾、香港、韓国、ブラジルで6月から9月にかけて開催され、入学課の職員らが出席した。

6月28日に実施された台北(台湾)の進学相談会では、職員らが個別相談を行い、20組以上の受験生らが訪れた。来場者は、入学試験制度や入学後のカリキュラム、キャンパスでの大学生活などについて積極的に質問する姿が見られた。

国際招聘研究員 研究成果を発表

国学院大学国際招聘研究員である李雁超氏の本学での研究期間満了にあたり、その成果発表会が7月22日、渋谷キャンパスで開催された。同氏の研究テーマは「『馬娘婚姻説話』の日中比較」。古典や民間伝承に残る説話の類型化とその日中比較や、同説話と養蚕業とのかかわりに注目して中国の蚕神信仰が残る地域や「オシラサマ信仰」が根付く遠野周辺でのフィールドワークを実施、同説話を語り継ぐことで衰退しつつある養蚕業も後世に伝えることができると指摘し、研究者や地域住民が口承文学と地域振興策を融合させている遠野地方に、今後も注目していきたいと述べた。

たまプラーザ宇宙の学校2026 学生が子どもたちの学びをサポート



「たまプラーザ宇宙の学校2026」の令和8年度第3回スクーリングが7月11日に開催された。「宇宙の学校」は人間開発学部の学部活性化事業「人間開発・花咲くプログラム」の一つとして、小学校低学年児童とその保護者を対象に毎年行うもので、運営はすべて学生が担当している。

最終回となる今回は、バスボムを使用したロケット作りや、子どもたちが家庭で保護者と一緒に挑戦した実験や工作、観察の結果を発表する「レポート発表」が行われた。

閉校式では、近藤良彦校長(同学部教授)から子どもたちへ修了証が手渡された。運営に携わった学生は「参加した子どもたちが生き生きと取り組んでくれていた姿を見て、やりがいを感じた。この催しを通して得た学びを持ち帰って、今後の学校生活などで生かしてくれたらうれしい」と振り返った。

教職員人事

【退職】

◎自己都合

◆大学事務局◇専任▽岩崎治美(総合企画部入学課主任)(令和8年9月30日付)

観光まちづくり演習Ⅲ 全体報告会で地域の将来像と 実現方策を提案

観光まちづくり学部3年次必修科目「観光まちづくり演習Ⅲ(構想・提案)」の全体報告会が7月21日、たまプラーザキャンパスで開催された。

この科目では、具体的な地域を対象に、観光と交流を軸に活力ある地域の実現を目指す「観光まちづくり」の将来像と、その実現のための方策をグループで立案する。学生らは、横浜・相模原・湯河原・神田・谷中の5地域を対象におよそ60人ごとの「スタジオ」に分かれ、さらに6人ほどでグループを組んで調査を行い、提案を作り上げてきた。

報告会では、それぞれのスタジオで行った最終発表の評価をもとに選ばれた2グループ、計10グループが全履修生の前で発表した。学生らは対象とする地域の課題を掲げ、現地調査やアンケート結果などを踏まえながら、地域の特色や歴史、文化を生かす提案を行った。発表後には質疑応答の時間が設けられ、学生や教員から多様な質問が投げかけられた。

最後に、梅川智也・同学部長(教授)は「観光まちづくり学部のコンセプトは『地域を見つめ、地域を動かす』ことだが、『地域を見つめる』ことはできても、『地域を動かす』ことは難しい。理想を語るだけでなく、実現に向けて動くことが観光まちづくりだ。その学びを今後も続けてほしい」と述べ、これまで演習科目に取り組んできた学生らをたたえたⅡ写真。



地域ヘルスプロモーションセンター 学生主導で企画運営

人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターが主催する「わくわく海底研究所2026」が7月11日、たまプラーザキャンパスで開催され、幼児から中学生までの子ども約30人とその保護者

が参加したⅡ写真。同センターでは毎年、子どもたちが体を動かす参加型の「わくわく」イベントを行っている。今回は支援学生の会「ちーへる」に所属する学生が企画・運営を担当する三つのゲームを実施した。



SPORTS QUAREのアリーナに集まった子どもたちは、まず全員でウォーミングアップの体操を行い、その後、チームに分かれ、学生たちが海の生きものをテーマに工夫を凝らして作った輪投げやボール投げなどのゲームに挑戦した。参加した子どもたちは「いろんな遊びをみんなと体験できて楽しかった」と笑顔で話した。

学問ノ道

【経済学部60周年スペシャル】



経済学部准教授

芳賀英明

はが・ひであき 修士(経営学)。専門はマーケティング論、特に消費者行動論。令和4年より現職。主な著書として、『デジタル経済下の消費者行動』(分担執筆、有斐閣、2026年)などがある。

経済学部が創設された60年前と比べ、現代の消費者が接する情報は飛躍的に増加しました。かつては情報をいかに入手するかが重要でしたが、今はあふれる情報から何を選ぶかが課題になりつつあります。動画配信サービスで見たい作品を選ばずに時間が過ぎてしまふ、ネット通販で似たような商品が並びすぎて結局選ぶことができない―こうした「選択のパラドックス」は、誰もが日常で経験しているのではないのでしょうか。こうした環境の中で私が研究に取り組んでいるのは、AIのレコメンデーションに選択を委ねる「選ばない消費」という選択方略です(徳吉哲秀・芳賀英明「選ばない消費―デジタル化が生み出す新たな選択方略」青木幸弘・野村拓也編『デジタル経済下の消費者行動』)。これは思考停止によって選択を放棄することではありません。情報過多によるストレスを軽減し効率よく選びたいというニーズと、あえて予期せぬ出会い(セレンディピティ)を求めたいというニーズ―見相反するこの二つの心理の双方に込めるのが「選ばない消費」なのです。

「選ばない消費」と「つながり」の心理学 ―AIに委ねる時代の消費者心理

例えば、動画配信サービスの「あなたへのおすすめ」に乗っかって視聴作品を決める人は少なくないでしょう。この時、消費者はAIという他者に判断を委ねながらも、自分を理解してくれる存在として受け止め、AIとの間に感情的なつながりや信頼関係を築く可能性もあります。生成AIが単なる機械ではなく、「パートナー」のような存在として受け止められつつある今、この「委ねる」という行為の背後にある人間の心理に、私は関心を寄せています。消費者行動論との出会いは計

画的なものではありませんでした。当時学生だった私は企業全体を捉えるよりも、自分の日常に近いところから研究できる分野を探していました。そうしたなかで、消費者行動論と予期せぬ出会いをしました。人がなぜ他者に影響されるのかをもっと深く探究したいと考え、気づいた時には博士課程まで進んでいました。振り返れば、私が学問を選んだというより、問いの方に捕まっていたのかも知れません。

研究者

聞く

文学部 日本文学科
安西 晋二 准教授

昭和と令和をつなぐ文学の橋

澁澤龍彦という迷宮への誘い
異端の作家を文学史に位置づける青春時代の
作家澁澤龍彦との出会い

日本近現代文学、特に澁澤龍彦という、昭和30年代から60年代にかけて活躍した作家のことを研究しています。フランス文学を中心にした広く深い素養をもとに、たとえば『黒魔術の手帖』『毒薬の手帖』『世界悪女物語』などといった著作を執筆したり、一般的な道徳からはかけ離れた作風で知られるフランスの作家マルキ・ド・サドの小説を翻訳して国内で紹介したりした書き手です。

怪奇、恐怖、幻想、神秘、耽美、エロティシズムやオカルティズムなどさまざまなテーマを横断しながら、仄暗い世界へと読者を誘うその独特の筆致は、多くの読者を獲得してきました。三島由紀夫との交友関係でも知られている人ですね。

私は昭和51(1976)年生まれですが、特に同世代から上の人たちは、多大な影響を受けてきた澁澤ファンがかなりいるのではないのでしょうか。私自身は幼い頃から妖怪や幽霊、UFOといった類のものが大好きで、物心いつてから澁澤に魅かれていったのも当然の流れだったと感じます。言葉を選ばずにいえば、いまの表現でいうところの「中二病」をこじらせた人、そうした感性のもとで青春時代を生きた人間ならば一度は手を伸ばすような著作を手がけていたのが澁澤だったのです。

アカデミズムでは
評価されていなかった澁澤

澁澤の著作の多くはいまも河出文庫を中心に刊行されています。「下妻物語」などで

は、キャリアを通じて、ヒューマニズム批判をそれとなく続けています。つまり、人間という存在を中心としたエゴイスティックな価値観への批判ですね。澁澤が人間以外の存在として「怪奇」を描くときには、そうしたヒューマニズム批判の視点が多分に含まれていることがある。

これを現在の視点で考えると、たとえば排外主義的なアジテーションも、自分という人間の安定性を疑わないという意味では実はヒューマニズム的である、といえなくもない。さらには、そうした安定した自己の外側にこそ、人間以外の、コントロールできない「怪奇」が存在するのではないかと……といったような考え方もできるように思います。

興味深いことに、澁澤自身は確固たる自我の持ち主であり、ある意味で確信に従って生きていた人なのですが、そうした澁澤が書き残したもののなかにはさまざまな揺らぎが宿っているんです。その揺らぎも含めて、「怪奇」のことを考えてみるという手はあるような気がしています。

日常と怪異が繋がる
現代の価値観で読む面白み

それに連なるようなもうひとつの可能性として、現在の感性や価値観のもとで澁澤を読んだら、とどうなるか、ということにも関心があります。たとえば日本でも2010年代以降に一気に受容が進み、各方面で話題を呼んできているマーク・フィッシャーという思想家がいます。彼はその名も『奇妙なもの』と題してその小説・映画・音楽・文化論集(五井健太郎訳、Pヴァイン、2022年)という著作があるのですが、澁澤が「幻想」として語っていたものはフィッシャーが「奇妙なもの」「ぞっとするもの」と名指したものと重なり

合うんです。そしてそれは、ホラーやネット怪談などが流行し、どこか日常と「怪異」がシームレスにつながるような感覚を抱いている私たちの現在とも、無関係ではないとも思うのです。昭和の感性で澁澤を読むだけでは見えてこない、今だからその面白さが、きつとあるだろうと感じています。

最後に、これも面白く取り組んでいる仕事としてご紹介できればと思います。文学部日本文学科の同僚である中村正明教授にお誘いいただいたので、一緒に監修・編集・解題に取り組んでいる『明治初期毒婦小説集成』全7巻(ゆまに書房、2025年4月)です。明治初期という時代において、江戸期の戯作の系譜を受け継ぎながら、活版印刷の勃興と共に人気を博した「毒婦小説」。私としては『世界悪女物語』を著した澁澤の専門家として興味深いのと同時に、ひどい男に振り回される女性たちの姿は現代的・ジェンダー的な観点から読み解ける可能性があるようにも思われます。澁澤を読むことが、自分としても予想外な、こうした広がりをもつことに、新鮮な感覚を抱いているところですよ。

あんざい・しんじ

博士(文学)。専門は日本近現代文学、澁澤龍彦。本学兼任講師などを経て、令和6(2024)年より現職。主な著書に、『反復／変形の諸相―澁澤龍彦と近現代小説』(翰林書房、2016年)、『明治初期毒婦小説集成』全7巻(共著、ゆまに書房、2025年4月〜)などがある。

怪奇を考える
実話怪談から見える可能性コロナ禍に知った
今っぽい「怪奇」

最近、気になっているのは「怪奇」です。幼い頃から幽霊や妖怪といった得体的な知らないものが好きで、そこから澁澤龍彦の文学世界へと深入りしていくことになったことはインタビューの最初で触れました。澁澤の広い教養や関心も含めて日本近現代文

「猥褻をめぐる裁判に澁澤がどう向かい合ったのか」ということについては、私自身も論文を書いてきたようにさまざまな議論があるのですが、ひとまず世間のイメージの一部は「猥褻な文章を世の中に流布して有罪になった人」というものなのかもしれません。

日本の古典、海外の文献を
自由に扱う澁澤の軽やかさ

実は私の恩師も、澁澤のことは大好きで、作品をよく読んでいらした人でした。しかし、それはあくまで文学の愛好者として。ご自身の息子さんが中学校の図書館で澁澤龍彦の全集を借りてきたと聞いたときは、「信じられない」と驚いていたのです。「安西や私が読んでいるのはいいけれども、息子や読むのはどうかと思う」と(笑)。年配の世代の方々が抱いていた澁澤イメージを考えれば、その距離感は理解できるものではあります。

いずれにしても、世の中では一定の人氣があるけれども、アカデミズムの世界ではなかなか評価されない時期が長く続きました。幸い、近年では澁澤について論文を書く方も増えてきて、ようやく研究対象として認められるようになってきています。

日本文学の流れのなかに澁澤を位置づけるのではないかと、という話にかんじては、たとえば彼の遺作であり、現在は文春文庫で読むことができる長編小説「高丘親王航海記」を挙げるとわかりやすいかもしれません。平安時代初期に実在した人物、高丘親王をめぐる物語なのですが、澁澤が吸収してきた日本の古典も、そして海外の知識も、さまざまなものが投げ込まれた幻想譚になっています。

私が博士論文をまとめた『反復／変形の諸相―澁澤龍彦と近現代小説』(翰林書房、2016年)には、澁澤の「翻案・引用・方法」としての「パロディ」を論じた箇所がありますが、澁澤は場合によっては剽窃と見まがうような、しかしそこにたしかな創造性を感じさせる「反復・変形」を施した文章を書いた人でした。明治以降の近代文学における、作家のオリジナリティをめぐる考え方にはあまりこだわらず、日本の古典や海外の文献も含めて自由に横断していくようなクリエイティビティが、そこにはある。澁澤を起点にすることで、近現代小説のひと味違う読み方を示唆できないかと思ひ、研究を進めています。

学を研究するなかで、改めて「怪奇」というテーマに目が向くようになったのは、実はコロナ禍が大きなきっかけだったのです。

家からなかなか出られず、仕事もオンラインで取り組むしかない日々。読書好きの方はご記憶にあると思うのですが、あの頃はなかなか書店にも足を運べず、私も電子書籍を購入するようになりました。電子書籍のサブスクリプションを購入すると、その読み放題のラインナップのなかに、竹書

国学院大学メディア

国学院大学が蓄積し醸成してきた知恵を
多彩なスタイルでご紹介します。





国際交流送別会 留学生を送る

国際交流送別会が7月24日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催された。写真。大学院交換留学生とK-STEP交換留学生の計22人が留学期間を終えるにあたり、学生や教職員、フレンドシップファミリーなどが参加し別れを惜しんだ。

田原裕子・国際交流推進部長(経済学部教授)が「本学での学びを人生の糧としてほしい」とあいさつし、留学生一人一人に修了証を手渡した。

続いて留学生らがあいさつに立ち、「国学院大学で出会った友人たちや教職員、フレンドシップファミリーのおかげでとても楽しい留学期間だった。ここでの学びや経験を今後の生活で生かしていきたい」などと語った。その後は、留学生の母国料理などが振る舞われ、食事を楽しみながら思い出話に花を咲かせた。

最後に星野靖二・国際交流推進委員(研究開発推進機構教授)が「この経験を次に活かしていき、今後も積極的に日本に関わる活動をしてほしい」と述べ、留学生にエールを送った。最後は、代表留学生2人のかけ声による三本締めで、会が締めくくられた。

Door to the world 留学生が 在学生に向けて母国語をレクチャー



国際交流課が主催する「Door to the world～交換留学生の母国語に触れてみよう～」が渋谷キャンパスで、5月12日から7月16日にかけて計14回実施された。この企画は、学生の国際交流と留学生の日本語力向上を目的として初めて実施されたもので、今年度はイタリアとフランスからのK-STEP交換留学生・科目等履修生が、参加した学生に向けてそれぞれ母国語のレクチャーを行った。

6月25日に実施されたイタリア語のレッスンでは、留学生が数の数え方や、定冠詞と不定冠詞、動詞の活用について、スライド資料を用いながら分かりやすく解説。参加した学生は、名詞の種類によって活用方法が異なる点に苦戦しながらも積極的に発言し、終始和やかな雰囲気での交流を深めた。

WORLD FOOD FAIR 2026 SPRING 学生食堂で留学生の母国料理を提供

「WORLD FOOD FAIR 2026 SPRING」が、6月29日から7月17日にかけて渋谷キャンパスのメモリアルレストランで開催された。この催しは、留学生が、母国の味を学生や教職員にも楽しんでもらおうと企画したもので、期間中は留学生ゆかりの各国料理が週替わりで提供された。

1週目では、ベトナム料理のフォー、2週目では韓国料理であるチーズタッカルビ丼、3週目ではスペイン語圏の伝統料理、アロス・コン・アピチュエラス・イ・セルド(米、豆、豚肉を使った料理)が登場した。

それぞれの初日には留学生が集まって食事が開かれ、料理へのこだわりや日本の食文化との違いについて語り合う姿が見られた。企画に携わった留学生は「慣れ親しんだ味を日本の友人たちと楽しむことができてうれしかった」と笑顔で話した。

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

合同企業セミナー(秋)

- 各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が来校し、業界や企業の説明をします。毎年多くの先輩がこのイベントをきっかけに、さまざまな企業を知り内定獲得まで進んでいます。この機会に志望する企業や業界への理解を深めましょう。
- 10月7日(水)、21日(水) 他 1～3年生、博前1年次

博物館

料無料 開10時～18時(最終入館17時30分)。祝日を除く月曜休館
※博物館関連イベントの問い合わせ ☎03・5466・0359

企画展「杉原祥造没後100年 刀剣学総論―学際研究が紐解く「日本刀史」―

- 我が国の代表的な工芸品である「日本刀」は、平安時代半ばの10世紀頃に誕生したとされています。その発祥と展開に関する研究には、鎌倉時代の刀剣書にさかのぼる蓄積があり、刀工の系譜や位列、作風に関する知見が記録されてきました。今回は、本学の教壇において最初に刀を論じ、名刀「山姥切國廣」を見出したことでも知られる杉原祥造の没後100年を記念し、刀剣研究の今昔を物語る展覧会を開催します。連綿たる日本刀の歴史を顧み、刀剣研究史における院友(本学卒業生)研究者らの足跡をたどるとともに、理化学的分析を含めた最新の研究成果を紹介します。
- 9月19日(土)～11月15日(日) 博物館企画展示室

インフォダイジェスト

内容 日にち 時間 場所 対象
定員 料金 申し込み 問い合わせ

…在学生 …保証人 …卒業生 …一般 …受験生

大学からのお知らせ

災害で被害に遭われた皆さまへ

令和8年熊本地震、令和8年8月、9月に発生した大雨による災害などにより、災害救助法が適用された地域に主たる家計支持者が居住し、家計の急変で今後の学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保証人(父母等)と相談のうえ下記の大学各窓口までご相談ください。適用対象地域は本学HPや内閣府防災HPでご確認ください。

▶学生生活課(渋谷 ☎03・5466・0145、
たまプラーザ ☎045・904・7714)
▶大学院事務課(☎03・5466・0142)

令和9年度 総合型選抜入学試験 (公募制自己推薦(AO型))

令和9年度の公募制自己推薦(AO型)を実施します。詳細は本学HP(二次元コード)でご確認ください。
※本学の公募制自己推薦(AO型)はWeb出願システムによる出願となります。

▶入学課(☎03・5466・0141)

イベント

令和8年度「観月祭」

令和8年度「観月祭」(第16回)を開催いたします。観月祭とは、供物を献じて十五夜の満月を鑑賞する「中秋観月」に由来する行事です。国学院大学では、平成22(2010)年から、毎年10月に斎行されてきました。祭儀は、神前に誠をささげたのち、楽器の音色を楽しむ「管絃」と、神を和めるための「祭祀舞」、彩り豊かな「舞楽」が順に演奏されます。

10月17日(土)開演16時(祭典斎行15時30分)

場渋谷キャンパス

料無料

詳細は本学HP(二次元コード)まで

問神道文化学部(☎03・5466・0209)

令和8年度 ホームカミングデー

院友(本学卒業生)とご家族、ご友人、在学生、一般の方に、国学院大学へ集い親睦を深めていただくホームカミングデーを今年も開催します。一部企画を除き、どなたでも参加可能です。また、ホームカミングデーへの参加団体企画の募集も行っています。詳細は、大学HP(二次元コード)でご確認ください。

11月8日(日)10時30分～ 場渋谷キャンパス 対象卒業生とご家族、在学生、一般の方 料無料

問校友課(☎03・5466・0131、✉soumu-kouyu@kokugakuin.ac.jp)

第11回 地域交流スポーツフェスティバル

日頃気になる健康指標、楽しみながら測定してみませんか? 本イベントでは体力測定、骨密度測定、体組成測定などを無償で体験することができるほか、体験する機会の少ないスポーツや未就学児を対象としたキッズコーナーなど、体を動かすコーナーも充実しています。子どもから高齢の方まで幅広い年代の方に楽しみながら「見える健康」を提供します。

10月18日(日)10時～15時
(昼休み12時～13時※会場立入不可)

場たまプラーザキャンパス

対年齢不問 料無料

申本学HP(二次元コード)から申し込み

問人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター
(✉kchpc@kokugakuin.ac.jp)

令和8年度 文化講演会「今、なぜ『万葉集』か」

1300年前に詠まれた歌が、今もなおわれわれの心を揺さぶります。その『万葉集』の魅力を、上野誠・文学部教授(特別専任)と、日本を代表する女優の松坂慶子氏とで語り合います。

10月24日(土)14時30分～16時

場渋谷キャンパス

料3000円

申10月16日(金)締切。

詳細は専用HP(二次元コード)から

問エクステンションセンター(☎03・5466・0270)

第17回 共育フェスティバル

地域子どもたちに、学び、遊び、体験を通じて楽しんでもらう共育フェスティバルを開催します。絵本の読み語りやスポーツチャレンジ、コンサート、ワークショップなど15の企画でお待ちしています。詳細や参加にあたっての注意事項は大学HP(二次元コード)でご確認ください。

10月25日(日)10時～15時

場たまプラーザキャンパス

料無料 申当日受付

問学生生活課

(たまプラーザ ☎045・904・7714)

令和8年度 ホームカミングデー

院友(本学卒業生)とご家族、ご友人、在学生、一般の方に、国学院大学へ集い親睦を深めていただくホームカミングデーを今年も開催します。一部企画を除き、どなたでも参加可能です。また、ホームカミングデーへの参加団体企画の募集も行っています。詳細は、大学HP(二次元コード)でご確認ください。

11月8日(日)10時30分～ 場渋谷キャンパス 対象卒業生とご家族、在学生、一般の方 料無料

問校友課(☎03・5466・0131、✉soumu-kouyu@kokugakuin.ac.jp)

プロになる努力を重ねる中で培った、自ら成長を切り開く力

世代別のサッカー日本代表候補にも選出された経験を持つ鈴木善さん(健体4)。所属する蹴球部で競技力を磨く一方、ゼミでの研究や教職課程を通して学びを深め、その知識を競技にも生かしている。競技と学びの両面で自らを高め続ける鈴木さんに、その成長と将来への思いを聞いた。

「小学生の頃、兄をドリブルで抜けないのが、とにかく悔しかった」

幼い頃からサッカー少年だった鈴木さんの最大のライバルは、3つ上の兄。たとえ体格差のある相手だろうと、シュートもドリブルも負けたくない。どうすれば勝てるのか。何が足りないのか。そんなことを考えながら、工夫を凝らし続けた。

入学した中高一貫校は、学業と部活動の両立を掲げる校風だった。テストの成績次第では部活に参加できなくなるため、サッカーだけに集中するわけにはいかない。早朝から夜遅くまで練習に明け暮れ、電車で眠たい目をこすりながら勉強する日々。それでも6年間努力を重ね、中学・高校時代ともにキャプテンとしてチームをまとめる役割を担った。先生からチームを束ねる統率力を評価され、後輩からも「鈴木さんがいるとチームがまとまる」と頼りにされた経験は、努力が結果につながることを実感する大きな自信となった。一方で、プロサッカー選手は「いつかなれたらいいな」と思い描く憧れの存在でもあった。

大学では、高校時代からよく知る監督のもとで真剣にサッカーに打ち込みながら、中学・高校時代から続けてきた文武両道を実践したい。そう考えて選んだのが本学の人間開発学部だった。身体能力の開発からコンディショニング、スポーツ心理学まで競技に生かせる学びが充実していることに加え、教員免許を取得できる点も魅力だった。大学1年次には、将来、指導者としてのキャリアも積んでいきたいという思いから、保健体育の教員を志すようになり、競技と学修の双方に力を注いだ。

大きな転機は、2年次の12月。世代別のサッカー日本代表候補に選ばれたのだ。自分たちよりも強い大学との試合で活躍できたことがきっかけだった。

「このチャンスを生かしたいと意気込んでいました



鈴木 善さん(健体4)

が、最初は周囲のレベルに圧倒されてばかりでした。自分が今まで当たり前だと思っていた基準が、プロを目指す選手たちの中では通用しないことを実感しました」

合宿所に集まったライバルたちの中には、すでにプロとして活躍している選手もいた。彼らとの差は、技術や身体能力の高さだけでなく、自己管理意識にもあった。練習後のケアはもちろん、食事や睡眠にも細心の注意を払う彼らの姿から、プロとして戦うためには競技以外の部分にも向き合う必要があることを学んだという。悔しさを糧に挑んだ合宿最終日の練習試合では、良いプレーができ、試合後にはさらに、高いレベルでも競争できる自信が生まれた。同時に、それまで漠然と抱いていたプロサッカー選手への憧れは、達成すべき具体的な目標へと変わった。

鈴木さんは早速、これまで感覚的に捉えていた課題を講義やゼミで学んだ知識を基に一つずつ見直していった。教科書を読み返ししながら理解を深めるとともに、食事や睡眠の改善にも取り組み、試合中にミスをして引きずらないメンタリティや、試合後半でも運動量が落ちないコンディションづくりなど、授業で学んだ理論を自身の競技生活に落とし込みながら改善を重ねた。

「身体組成と食事・睡眠の関係」をテーマにした卒業論文では、インボディ(身体組成測定器)を用いて、自身の筋肉量や骨量の変化をデータとして記録した。ま

た、自身の競技経験も踏まえながら、食事や睡眠が身体組成や競技パフォーマンスに与える影響を論理的に分析した。自分の身体の状態を客観的に知ること、競技力向上に向けた取り組みにも、より明確な根拠を持てるようになったという。学んだことが自分の成長として表れるたびに、目標へと着実に近づく感覚があった。

また、高校時代に後輩を指導した経験から、教えることも好きだという鈴木さん。所属する蹴球部では、小学生や幼稚園児に向けたサッカー教室も行っている。技術を伝えるだけでなく、一人一人の成長を見守りながら声を掛ける中で、指導する側の責任や、人を育てることのやりがいも感じているという。競技者として自分を高めるだけでなく、将来誰かの成長を支える立場になるための学びも、大学生活の中で積み重ねている。

「いつも意識していることは、ひたむきに努力し続けることです。何事にも強い心を持って取り組みれば、自分で環境を変えることができると思っています。いろいろな道が開けることを、プロになって証明していきたい。僕を見て、後輩たちもそう思ってくれたらうれしいです。そして引退後は、教師として、挑戦する楽しさを子どもたちに伝えたいです」

まっすぐな目でそう語る鈴木さん。大学で夢を、ピッチでボールを、追いつける。その挑戦は、これからも続いていく。

第33回



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。人間開発学部初代学部長、専門は教育社会学、人間発達学。新しい時代の子育て論には定評。

「甲子園」に学ぶ「修理固成」の育て

「強いチームとは、道具を大切に作るチームです」

これが、巨人軍の元監督原辰徳氏の父親で、三池工業高校を夏の甲子園優勝に導き、当時、三池炭鉱の廃鉱で疲弊していた大牟田市を元気づけたノンプロの名監督・原貢氏の講演での最初の一言でした。

この講演への期待が高かっただけに最初、落胆さえしました。しかし、これは、國學院大学の設置基盤である『古事記』『国生み』につながる、主体性・自発性の育成を目指す「修理固成」の育てに関わる奥深いものでした。

原貢氏は、野球道具をしつかり手入れをしているチームが対戦相手の場合は、たとえ前評判は高くないチームであっても気を引き締めろと号令をかけていた、と言うのです。それは、なぜでしょう。

「道具への思いやる気持ち、仲間への思いやりにもつながる。仲間のことを思いやっで、仲間がエラーしても心の底からドンマイと叫ぶようになる。お前のエラーは、俺のバットで取り返してやる、と。また、自分は今、何をすべきか、と監督の願いや思いも推し量ることができる。これが、

粘り強い二枚腰のチームをつくるのである」と、と。

今年も、逆転に次ぐ逆転で目の離せない歴史的な決勝戦という感動を残して、夏の甲子園大会の幕が閉じました。シカゴ行きの機上で閲覧した雑誌に「koshien」というタイトルの記事が掲載されていました。

その副題は、「武士道と神社」。甲子園野球の高い精神性は、武士道に通じるものであり、球児にとって甲子園に赴く気持ちは、神社にお参りするような厳粛な気持ちなのだ、という内容でした。

このコメントには、青い目の日本特派員特有の脚色が入っているとも言えます。しかし、甲子園野球が日本人の生活に溶け込んでいるだけでなく、「修理固成」という日本古来の教育風土として根付いていることも否定できません。

2007年夏の佐賀北高校の公立高校での甲子園優勝は、甲子園野球の原点が現存していることを示した点でも意義深い、と賞賛されました。実は、その監督は百崎敏克氏で、國學院大学出身です。

今日の子ども達は、「生きる力」となる「夢、希望、自

信」が持てないでいる、と一般に評されています。「自分への自信の喪失」、小生の言う「損在」状態です。しかし、私たちはその彼らを、自分を大切な存在にとらえる「尊在」へと変える必要があります。「尊在」となつて初めて他者への思いやりも持つことができます。

自ら意欲して「なる・なろうとする」人間の育成を図る國學院大学の「修理固成」の育てでも、甲子園野球から学ぶことは少なくないのです。

最後に、選手に主体性、自発性の育成を図り、今年の東都大学野球1部リーグ春季大会で5回目の優勝をなした國學院大学硬式野球部監督・鳥山泰孝氏の「下野新聞」掲載の言葉を挙げておきます。

「学生には、意識、行動、継続、体得、自信を『成長の5段階プロセス』として4年間で身に着けるよう指導してきました。これを心の根っこに染み込むまでやり込むことで卒業後の生き方になるはず」



近くて遠い？ 遠くて近い？ そんな親の気持ちや子どもの気持ちを一緒に考えませんか？ 新富名誉教授による子育てエッセーを隔月でお届けします。

感想や新富名誉教授への質問、講演依頼などございましたら広報課までお寄せください。

硬式野球部

東都大学野球秋季リーグ開幕 白星でスタートを切る

東都大学野球秋季1部リーグが9月8日、神宮球場（東京都新宿区）で開幕を迎えた。国学院大学硬式野球部は、第1週で立正大学と対戦し、2勝1敗で勝ち点を挙げた。

9月8日の開幕戦は、二回裏に2点を先制されたものの、三回表で緒方連選手（健体3）がレフトへの2ラン本塁打で2点を取り返す展開に。しかしその後は点数を重ねられず、2-4で敗れた。

9月9日の2回戦では、二回裏に花田悠月選手（神文2）、石井嘉朗選手（法4）のヒットで1死一・三塁とすると、赤堀颯主将（経営4）の犠飛で1点を先制。三回表で一時同点となるも、五回裏で3点、六回裏では1点を追加した。八回裏では、1死満塁のチャンスを、緒方選手がレフトへの適時打、さらに石野蓮授選手（経営3）がレフトへの適時二塁打、篠本賢伸選手（健体4）の打球が捕球エラー。この回で一挙5点を獲得し、10-2で勝利した。

9月10日の3回戦では、一回表に先制されるも、三回裏で佐藤大空選手（経4）のヒット、花田選手が犠打で送り2死二塁とすると、赤堀主将がライトへの2ベースヒットで得点をあげ、金子晁也選手（経営

3）がショートへの内野安打、緒方選手が四球で出塁し2死満塁とすると、石野選手のレフトへの適時打で2点を加え、この回3点を獲得した。九回表で逆転されるも、石野選手がレフトへの2ラン本塁打で2点を加えて再び逆転し、5-4でサヨナラ勝ちを収め、開幕戦1週目は白星でのスタートとなった。

同部は、第2週を中央大学、第3週を東洋大学、第4週を亜細亜大学、第5週を青山学院大学と対戦する。



始球式に登場した佐柳理事長



開幕戦で2ランホームランを放った緒方選手

東都大学野球秋季リーグ始球式 佐柳理事長が投球を披露

雨天順延となった8日の開幕戦では、本学硬式野球部が今年2月の遠征先で交流を深めたマレーシアのナショナルチームのメンバーらが守備位置につく中で、学校法人国学院大学の佐柳正三理事長が始球式を務めた。

陸上競技部

ホクレン・ディスタンスチャレンジ2026 野中主将が日本人トップ

国学院大学陸上競技部が7月8日に開催されたホクレン・ディスタンスチャレンジ2026 第2戦網走大会の男子10000mに、野中恒亨主将（健体4）、辻原輝選手（史4）、高石樹選手（健体2）が出場し、野中主将が

27分41秒33で、日本人1位の成績を収めたほか、高石選手も4位に入るなど、蒸し暑い気候でのレースの中でも安定した走りを見せた。

なお前日には関東学生網走夏季記録挑戦競技会が

開催され、同部から15人が出場した。初レースに挑む選手や、自己ベストを更新する選手が多かった。秋に始まる駅伝シーズンを前に、それぞれの課題に挑んでゆく。

柔道部

全日本ジュニア 荒川選手が優勝

令和8年度東京都ジュニア柔道体重別選手権大会が7月12日に東京武道館（東京都足立区）で開催され、男子90kg級のの中村勇吾選手（経3）が優勝、同66kg級の宮部蓮匠選手（観まち2）が準優勝となった。両選手に加え73kg級の荒川琉正選手（健体2、B強化）、60kg級の吉村悠之介選手（健体2、C強化）、66kg級の大柿将馬選手（法2、C強化）の3選手も推薦を受けて、9月12日、13日にリプロ武道館（埼玉県上尾市）で開催された2026年度全日本ジュニア柔道体重別選手権大会に出場した。同部からは、73kg級で荒川選手が見事優勝、66kg級では大柿選手が3位となりそれぞれ表彰台に上がった。荒川選手は、同大会を通して男女1人ずつが選出されるJOCジュニアオリンピックカップの表彰にも選出された。

また、男子45回・女子42回東京学生柔道体重別選手権が9月6日に日本武道館（東京都千代田区）で開催され、男子81kg級では林健成選手（健体4）が準優勝、73kg級の荒川選手、100kg超級の高橋翔選手（観まち3）が3位に入賞する結果となった。この大会は9月26、27日に行われる全日本学生柔道体重別選手権大会の予選を兼ねており、同部からは、表彰

台に上がった選手もあわせて計12選手が挑戦する。



全日本ジュニア柔道体重別選手権大会で優勝した荒川選手

蹴球部

辻選手 清水エスパルスに加入決定

国学院大学蹴球部に在籍中の辻友翔選手（経3）が、令和10（2028）年1月から清水エスパルスに加入することが決まった。

辻選手は、8月29日にJ1スタジアム日本平（静岡市）で行われた、清水エスパルス対柏レイソル戦に、スターティングメンバーとして出場した。なお、辻選手は同部初のJリーグチーム加入となる。



清水エスパルスに加入する辻選手（同部提供）